

からくり櫓

能村 研三

富士山

十葉を根こそぎ抜いて憂さ晴らし

雨音にこころを添はせ濃紫陽花

芒種けふ豆のスープのうすみどり

夏燕町に消えたる自転車屋

梅雨の町からくり櫓の小賑はひ

迎へ梅雨芸者小径の百度石

框拭くことより祭仕度かな

舳網祭の空へ放りけり

昏れがたの山巒近し祭笛

滝落つる内なる修羅を隠しゐて

八月の祝日は十一日の「山の日」。私の登山歴は決して多くはないが、中学、高校、大学時代に富士山に三回登ったことがある。他は浅間山、立山、三原山、阿蘇山など数えられないほどの経験で、登山家から見れば笑われてしまうような程度である。しかも俳句を作るようになってからは、吟行会のハイキング的なものを除いては登山らしき山登りはしていない。

今から思うと、もう少し山登りの経験を俳句にしていればよかったと後悔している。

登四郎も本格的に登山に取り組んだとは言い難いものの、健脚で私よりは山登りを得意としていたようだ。句集『咀嚼音』の時代には、姉の萌子と連れ立って立山に登っている。

霧をゆき父子同紺の登山帽

霧裂きてぎくりと峙ちし一の壁

さらには昭和三十三年、四十七歳の時に鳥取県の伯耆大山に登っている。

孤独登山者に巖裏ほそき滝一条

日の色の霧が霧追ふ行者谷

昭和五十三年には大学時代の同級

生と八甲田山に登っている。

八甲田連峰秋色未だし西つ方

榎の木平はしりの紅のななかまど

私が俳句の手ほどきを受けた福永耕二は、文学青年と思いきや大変な登山家であった。市川学園時代、文芸部の顧問でありながら山岳部の顧問も務められ、生徒たちを引き連れて北アルプス縦走を何度もされている。

第一回目の「沖」の勉強会は那須で行われたが、この時も夜遅くまで酒を飲んでいたにもかかわらず、まだ明けきらないうちに私たちを引き連れて山登りをし、その健脚ぶりに驚かされたことがあった。

私は三十代になってからも富士登山に挑戦したことがあるが、この時は悪天候に遭い途中下山を余儀なくされた。

荒天に小屋の夏炉の奥湿り

無念とも勇氣とも中途下山せり

最近では歩くのも以前より遅くなつたが、歩けるうちに時間をかけても富士山に登ってみたいと思うようになった。

能村 研三